http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html　令和7年3月3日

中北.com　チュウホク ドット コム

地域教育情報紙

中北教育事務所
教育支援スタッフ

6

TEL 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

中北の地域社会（community）の心の交流（communication）をめざします

～第6号の見出し～
◆ミニブックで地域の魅力を発信しよう！ ～白根高校1年生「総合的な探究の時間」の取り組みより～
◆子どもたちが拓く共生社会
　～穂坂小学校・韮崎北東小学校「総合的な学習の時間」における「わ～く穴山の里」との連携より～
◆#中北バトン 「質の高い保育って何？」 中巨摩保育連合協議会 会長 廣瀬 真弓
◆地域とともに ～かえで支援学校「やきいも会」「葡萄園の枝拾い活動」より～

ミニブックで地域の魅力を発信しよう！

～白根高校1年生「総合的な探究の時間」の取り組みより～

白根高校（伊藤裕之校長）1年生の「総合的な探究の時間」は、令和5年度より、南アルプス市や山梨大学と連携することによって進められています。今年度の1年生は、オリジナルのミニ観光ガイドブックを完成させることを目標に、「南アルプス市の魅力の読み解きと地域調査」を行ってきました。

A3用紙に「fumotto」「エコパ伊奈ヶ湖」等 8ページ分の情報が印刷されています（①）。これを折りたたむと、ミニブックになります（②）。

この白根高校の取り組みが、1月23日、敷島総合文化会館で行われた第2回中北地区地域教育推進連絡協議会において紹介されました。まず、同校一瀬晶子教諭が全体説明を行い、続けて代表グループ生徒6名が、「山の使い方」と題したミニブックについて詳細に説明しました。

本番前、代表グループの班長である河西叶夢さんに話を聞きました。

◎南アルプス市内に実際に置かれることを前提に、ミニブックを作りました。作成に当たり、どんなことが一番難しかったですか。

――ミニブックに何を載せるのか選ぶ最初の段階がものすごく大変でした。

◎それはなぜでしょうか。

――ミニブックを手にするのがどの年齢層の人でもあり得るという状況なので、わかりやすくしっかりしたものを作らなければいけないという思いや、（実際に市内に置かれることに対する）責任感があったからです。

代表グループの皆さんと一瀬先生
（後列右から2番目が河西さん）

◎ミニブックが仕上がった今、どんな気持ちですか。

――途中、完成するのかなと思う時もあったので、（取材先とやり取りして）写真も集まりましたし、仕上がってよかったとほっとしています。

発表後の質疑において、一瀬先生は、クラスごとのテーマ以外は生徒任せだったが、グループごと主体的にアイディアを出し合って考えることができた点、途中長期休みや定期試験などを挟みながらも、活動を継続し、みんなで一つのものを創り上げることができた点で大変有意義であったとこの活動についてまとめました。また、河西さんも、自身の成長した点として、「コミュニケーション能力」を挙げ、「ミニブック作成を通じて、学校と家の往復しかしていないと経験できない、社会に出ている人とのコミュニケーションを取ることができた」と活動を振り返りました。

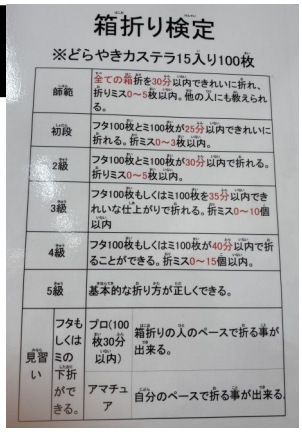
地域の魅力と地域愛が詰まったミニブックは全21種類です。見つけたらぜひ手に取ってみてください。

子どもたちが拓く共生社会

～穂坂小学校・韮崎北東小学校「総合的な学習の時間」における「わ～く穴山の里」との連携より～

穂坂小学校（小松建校長）の4年生、韮崎北東小学校（小田切真喜校長）の4年生が、「総合的な学習の時間」の中で、福祉施設「わ～く穴山の里」（小泉修施設長）と連携し、非常に貴重な学びを体験していると聞き、取材しました。

令和6年度から実施する箱折り検定も仕事への意欲を高める工夫の一つです。



箱折り検定

※どらやきカステラ15入り100枚

師範	全ての箱折を30分以内できれいに折れ、折りミス0～5枚以内。他の人にも教えられる。	
初段	フタ100枚とミ100枚が25分以内できれいに折れる。折ミス0～3枚以内。	
2級	フタ100枚とミ100枚が30分以内で折れる。折りミス0～5枚以内。	
3級	フタ100枚もしくはミ100枚を35分以内できれいな仕上がりで折れる。折ミス0～10個以内	
4級	フタ100枚もしくはミ100枚が40分以内で折ることができる。折ミス0～15個以内。	
5級	基本的な折り方が正しくできる。	
見習い	フタもしくはミの下折ができる。	プロ(100枚30分以内) 箱折りの人のペースで折る事が出来る。
		アマチュア 自分のペースで折る事が出来る。

「わ～く穴山の里」とは…「わ～く穴山の里」は、韮崎市穴山町にある障がいを持った方を対象とした福祉施設です。施設での活動を通じ、「生きる力を身につける」ということをテーマとして掲げています。ここでいう「生きる力」とは、障がいを持った方が、地域社会で生きていくために、働きながら生活できる力のことを指します。主任の平賀薫さんを始め、「わ～く穴山の里」の職員は、利用者が、それぞれの個性を生かし、力を発揮できる環境づくりを日々追求し続けています。そして、そのような環境のもと、利用者は、「挨拶・身だしなみ・困ったときに相談できること」などを大切にしながら、民間企業から受注したたくさんの仕事に取り組んでいます。

連携について…両小学校と「わ～く穴山の里」の連携は、福祉講話と施設見学という2本柱から成り立っています。6月、それぞれの小学校で福祉講話が行われ、4年生児童は、平賀さんたちから、生活に難しさがあったとしても、道具や仕組み、適切なサポートがあることによって、障がいのある方もやりがいを持って働けること、仕事をする上で、相談（発信力）が大切であること、またそれは、働く場面に限らず、日常生活においても重要であることなどを学びました。その後、9月には穂坂小学校4年生が、10月には韮崎北東小学校4年生が、「わ～く穴山の里」を訪れ、利用者が実際に働く姿を見学しました。児童は、「仕事をするときに今日は何をするのか確認し、目標を立ててがんばっていることがわかった」「一言もしゃべらずに集中してやっていてすごかった」「早くて丁寧に箱を組み立てていてすごいと思った」「見学者がいるのに一切手を止めることなく作業をしていた」「仕事をやりやすくするため色々な工夫をしていた」「障がいがあるからといってできないことはあまりない」「挨拶をしたり制服を着たり他の会社と同じだと思った」など、様々な感想を持ち、「福祉や共生」についてはもちろん、そもそも「人はなぜ働くのか」「働くとはどういうことか」などについても理解を深めました。

穂坂小学校の見学の様子

両小学校の先生に話を聞くことができたので、その一部を紹介します。

穂坂小学校4年担任・伊藤寛教諭の話…子どもたちは「これだけのことができるんだ」とすごく感動していました。「働いていて大変なことはないのですか」という質問に、利用者が、「あります。あるけれど、楽しいことがあるからがんばれます」と言っていました。子どもたちは、親御さんが苦労して働く姿を子どもたちなりに見ています。そして、「なんで働くんだろう。僕のためかな、何のためかな」と考えて、それだけだとなんとなく後ろめたい感じにもなるわけですが、（今回この連携を通して）子どもたちは、自分がやりたいことをやるため、自己実現をするための労働なんだということに気づき、だからこそ、大変なことがあってもがんばれるんだと、働くということをプラスに捉えることができました。

韮崎北東小学校4年1組担任・村松千鶴教諭の話…子どもたちがいい勉強をしたんだなということが感想からもすごく伝わってきました。どんどん書けますし。そして、その人その人の目標があることや環境設定をしておくことなど、学校と通ずるところがたくさんあるということも感じました。（施設の数々の工夫を見て）学校でもこういうことをもっとしていかなければならないと思いました。相談についても、こちらから言いやすい

システムを作っていくことが大事だなと思っています。1つだけ、体調も気分もいい人は「晴れ」、たとえば、昨日スポ少でつきゆびをしたから「くもり」「雨」というように、毎朝「心の天気」をホワイトボードに貼らせるということを始めました。コミュニケーションのきっかけになればいいなと思っています。

韮崎北東小学校の見学の様子

平賀さんは、この連携を「種まき」と表現しています。以下、平賀さんの熱い思いが詰まった言葉を引用します。

平賀薫さんの思い…生徒の皆さんは「障がい者を見たら助けてあげなければいけない」と感じているようですが、講話や見学を終えるころには、「障がいを持っているから何もできないわけではない」「皆、自分のことは自分でやりたいと思っている」「自分の親と同じように働いて生きている」と感想が変わってきます。これは非常に興味深いことです。誰もが同じように生きていく社会を考える時代になりました。10歳で「誰もが同じ」ことを知っている生徒の皆さんが、どのような大人になり、社会で活躍するのか…ととても楽しみです。学校だけではできない、異業種がつながることからできる学びの場は私たち大人にとっても学ぶべきことがたくさんあると感じます。

児童の感想や伊藤先生、村松先生の言葉は、平賀さんの思いが十分に伝わっていることを感じさせるとともに、平賀さんの願う社会が近い将来実現するであろうことを予感させます。「百聞は一見に如かず」という言葉の通り、体験のもたらすインパクト、特に体験が子どもに与えるインパクトは非常に大きいものがあります。今回取り上げたような取り組みが今後ますます広がっていくことを願います。

＃中北バトン　様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。

質の高い保育って何？

中巨摩保育連合協議会　会長　廣瀬　真弓

1月中旬に冬の遊び〝氷づくり〟を行った。子どもたちはお正月に飾ってあった赤や紫の木の実や色とりどりの花びらをカップに入れ、水を注いで思い思いの場所にセッティングした。さあ、あとは凍るのを待つだけだ！しかし翌日からは暖かい日が続き、なかなか氷はできなかった。諦めムードが漂う中で年長組では作戦会議が行われた。担任のさりげない一言をヒントに、子どもたちが氷ができない原因を探り、どうすれば凍るのか考え、あれこれ改良し毎朝見守ること数日間。とうとうその日がやってきた。「今朝は絶対に凍っている！」と確信し、誰よりも早く見に行きたい気持ちを抑えて事務所で仕事をしていると、勢いよく走ってくる子どもたちの気配を感じた。大きな声で私を呼び、息を弾ませた子どもたちの小さな手の平には、まるで高級果物店のフルーツゼリーのようなかわいらしい氷が載っていた。失敗を繰り返しようやくできたアート作品を手に入れた子どもたちと担任保育士は大きな達成感を味わった。

質の高い保育って何？

私は、難しい知識を勉強しなくても、特別な教材を揃えなくても、保育士の感性一つで保育の質は上がると思っている。

先日とっても嬉しいことがあった。朝から風が強く、寒い日の午後に年長児の設定保育の〝凧揚げ〟が予定通り行われた。

今まで子どもたちは、凧揚げは全速力で走って揚げるもの、と思っていたが、その日は走らなくても高々と凧があがることを経験した。子どもたちが凧揚げの醍醐味を知れたことが私は何よりも嬉しかった。

保育士それぞれの感性・価値観は違う。それでも共通して言えることは、保育士自身も子どもたちと一緒に楽しんで「今日は面白かったね！」と、心から子どもと笑い合える時間を過ごしてほしいということだ。

それだけで、十分、質の高い保育になるのではないかと思う。

地域とともに　～かえで支援学校「やきいも会」「葡萄園の枝拾い活動」より～

かえで支援学校（荒川昌浩校長）は、甲府市内の住宅地にあります。開校以来、地域の方との交流を大切にしてきました。12月5日、同校で、地域交流活動が2つ同時に行われると聞き、取材に出かけました。

「やきいも会」で収穫したさつまいもを食べよう！

「やきいも会」は、小学部1・2年生対象の行事です。10時ごろ到着すると、すでに校庭では、民生児童委員の清水隆善さんを含む8名の地域の方によって、たき火の準備が始まっていました。材料となるのは、生活単元学習において、児童が苗を植え、水やりをして育て、収穫したさつまいもです。児童たちは、一人ひとり火の中にさつまいもを投げ入れた後、焼き上がるまでの時間を地域の方と一緒にふれあい遊びをするなどして過ごしました。教員の一人は、この行事について次のように話します。

「食の幅は体験を通して広がっていきます。（長時間にわたる火の管理は）教員だけではできないので、（清水さんたちが）朝から火を起こして鎮火するまで見てくれ、とても助かっています。（おかげでこの行事を）安心して実施することができます」

この言葉の通り、でき上がったやきいもを受け取り、一心にほおばる姿からは、地域との連携により、児童たちが貴重な体験を積み上げていることがひしひしと伝わってきました。

明るい日差しのもと、皆でやきいもを食べました

地域の葡萄園で枝拾いをしよう！

枝拾いは、中学部2年生による活動です。2つの班に分かれ、学校から歩いて10分程の「中澤葡萄園」「松永葡萄園」まで赴き、作業を行いました。葡萄園との交流は今年度3回目となります。これまでも、笠かけや収穫のタイミングで交流をしてきました。葡萄園に着くと、挨拶を交わし、作業内容の確認をしてから、活動開始となりました。葡萄作りにおいて、枝拾いは欠かせない作業の一つです。次のシーズンによい葡萄を作るためには、伸びた枝を落とさなければならず、その過程で大量に出る枝を拾い、まとめる必要があるのです。生徒たちは、両手をいっぱいに使い、どんどん枝を集めていきます。「やり切って帰ろう～！」「先生、どいて～！」などの頼もしくはつらつとした声が聞こえてきました。作業の合間に両葡萄園の方と少し話すことができました。松永さんは、「（この交流は）かえで支援学校が今の場所に来てからずっとやっている」、中澤さんは、「年ごとに個性があって、来てもらうのが楽しみ。交流後、会うと挨拶してくれる子がいる」と語ります。この交流が、学校と地域双方に、意義深いものとして認識され、大切にされていることがわかりました。

葡萄棚のしたで「はい、チーズ！」

地域交流の機会を積極的に確保し、多様な体験を提供することは、子どもたちの成長にとって大変重要です。地域と連携し、教育活動の充実を目指すかえで支援学校の取り組みに、今後も注目していきたいと思います。

～紙面を飾ってみませんか～　地域教育情報紙『中北.com』は、年6回、奇数月に発行し、中北地区500か所以上に配付しています。学校や地域、諸団体での様々な取り組みをぜひ取材させてください。
お問い合わせは下記まで、お気軽にお声がけください。

令和6年度『中北.com』No.6　編集・発行　中北教育事務所　担当　内藤 賢 ・ 望月亜由
〒407-0024 韮崎市本町4-2-4　電話　0551-23-3046　FAX　0551-23-3013